

## 『共同の友』の世界

佐々木 馨

### (一) 『共同の友』の体裁と目的

私の手許に、表紙の中央に威風堂々と筆なめらかに『共同の友』と墨書で題字された一冊子がある。その右には「大正十年十一月」、左には「共同社」と、これまた見事な筆さばきで墨書されている。

このことから、私たちは『共同の友』が「共同社」によって、「大正十年十一月」に草されたものであることを、まずもって知ることができると。この『共同の友』の所蔵者は、青森県五所川原市石岡字藤巻八九に居住される寺田昭治さんである。

今を遡ること七〇余年の『共同の友』は、その表紙を一見する限り、現代の私たちをその筆勢で圧倒する。と同時に、この『共同の友』は、どのような世界を描いているものか、と私たちをその世界に誘いもする。すかさず、私はその第一頁を見開く。すると、そこには、先程の一段格調の高い表紙とは、全く異質な文字で刻まれた世界である。

「 拾一月廿三日 水曜日（雪） （健）丁度よく目が醒めたが暖かい床を離れるのは惜しくもあつた。澤田・館山君、湯屋に走る。僕等少しく豫習して後、八時前昇校し、朝食を食べた頃には、昇校児童

陸統として学校に押寄せた。

放課後、四時迄豫習をし夕飯後、宿に來たり。爐囲みて廿分間、雑談をし後、会議に移り種々の規則を定め、十時前床に就く。」

と、表紙とは異筆で記されている。この一文の次の行には、どうやら表紙の題字の筆者らしき筆さばきで、

「（評）文章の要領は得て居るが、今少し自由に筆を走らして書いて欲しい。」

との「評」が続く。

「健」が草したその一文を受けて、「喜」なる人物が、こう綴っている。

「 拾一月廿四日 木曜日（曇） （喜）はや遅しと思ひて床をはね起きた時は六時半。にぶい顔で床をかたづけ、七時半まで約一時間勉強せり。学校にと足を運ばしたるは八時頃なり。晩には（齊）（伊）（倉）三人加はれり。宿に帰ると、（鹿）（伊）（工）（倉）等、湯屋にと飛出す。是等の帰るまで、残の人々、雑談に耽けりたり。帰るやしく豫習にうつりたり。夜十時には、十一人頭を揃ひて寝に附く。」

この一文の後にも、やはり「評」がある。今度はこう記されている。

「評」丸で尋常四五年位の程度だ。こんな文章を書いては、師範入  
学どころか、高三年の価値はない。書順も充分練習せよ。一般に注意  
して置く。明日からの番の人は、一層広く高尚な思想を遺憾なく發揮  
して呉れ。」

「評」者の言は、前とは打って変わって、相当手厳しい。「評」者の  
文字は、実に達筆である。やはり、『共同の友』の題字は、この「評」  
者の手になるものに違いない。

私たちは、「健」と「喜」の十一月廿三日と廿四日の文章から、この  
『共同の友』がどんな性格の史料であるか、ほぼ見当がついた。

お察しの通り、『共同の友』は、「喜」の一文が示すように、十一名か  
ら成る「共同社」の日誌である。が、それは、単なる日誌ではない。日  
誌の末尾に付いている「評」言が如実に示すように、一定の教育的配慮  
が施された日誌である。

教育的配慮とは、具体的に言えば何か。「評」者の、十二月十五日  
(木曜日)に吐露した次の言葉がその全てを語っている。

「(この日誌を)書かせる目的は、綴方練習であるから、今少しあや  
をつけて文章を綴る様に願ふ。」

結論的にいえば、この『共同の友』は、師範学校ないし旧制中学校を  
目指す尋常高等科三年生のための、綴方の添削指導を目的にして綴られ  
た日誌なのである。

添削指導の目的をもつこの『共同の友』は、大正十年十一月廿三日  
(水曜日)に起筆され、翌十一年の三月六日(月曜日)に擱筆している。  
分量的にいえば、ヨコ十六センチメートル、タテ二十五センチメートル

の一枚十二行を持つ罫紙にして、一七二枚の本文が綴られている日誌で  
ある。

この四ヶ月足らずの日誌も、その「共同社」のメンバーが帰省した十  
二月廿九日～正月二日は空白であり、なぜか、二月五日～同十一日の期  
間も欠落している。

また、添削指導を目的にした日誌であることには間違いないが、  
「評者」の「評言」が確認できるのは、起筆の大正十年十一月廿三日か  
ら同十一年の一月八日までである。一月九日以後は、「評者」の眼から  
みても、一定の目的が達成された、と判断されたのか、「評言」は見え  
なくなる。

前の「拾一月廿四日」の「評言」で「師範入学どころか、高三年の価  
値はない」と厳しく扱下ろされた十一名の高三年の生徒たちが寄宿する  
「共同社」とは、果たしてどこに所在するのだろうか。

『共同の友』の中に、例えば、「十二月廿日」に「外は大分明るい、  
毛内林の鳥はさもあはれの聲を出して鳴いてゐた」とか、「一月七日」  
に「旭座にマンドリン・ヴィオリン、ツベホーン等の独奏会を聞くに  
行った。」というように、「毛内林」「旭座」という固有名詞が散見する。  
しかし、これでは余りにも雑駁すぎて、地域を特定することはできない。  
幸いなことに、この『共同の友』の中で、ただ一ヶ所だけ、「共同社」  
の所在地を確定できる箇所がある。それは、「一月十日(火)雪(伊)」  
の後半部分である。

「自分も師範生とならん為に、此の五所川原の高等三学年に来てゐる  
のである。されど、今迄の自分の勉強振では、今別れた坂本君の様に

師範学校に入学し、卒業後は世間の人の信頼する教師になれるだろうか、と思った。もし師範入学の際、落第したならば、此の上ない恥だと思ふ念が浮んだ」

「伊」が赤裸々に告白したこの一文の中の「五所川原の高等三学年」こそが、「共同社」の所在する場であった。

ここに至って、ようやく、私たちは、『共同の友』なる史料が、大正十年十一月廿三日～同十一年三月六日の期間、五所川原高等三学年の寄宿舎たる「共同社」において、師範学校ないしは旧制中学校の入学を旨指し、その入試準備の一環として、「綴方練習」を兼ねて綴った日誌であることを判明することができた。

『共同の友』を通読すると、そこに当時の高等三学年の生徒たちのまさに青春の群像がさまざまに動めていることを発見することは、そう困難ではない。その具体的な生き様については、次章で見ることにし、本章では、最後に、『共同の友』の世界に登場する人物を列挙しておくことにしよう。

『共同の友』の綴り手であり、「共同社」の社生十一名は、次のメンバーである。

沢田、館山（良）、倉光、工藤（寛得）、鹿内、新井勝衛、杉江（和三郎）、永沢貞三、伊藤、斉藤、土岐（喜）。

この十一名が寄宿する「共同社」には、さまざまな友達が入りし、交遊を展開する。その「共同社」外の人物は、次の通り。

嵯峨、松本、杉山、米塚、寺田、坂本、小野、神武、三浦、高橋、白戸、竹屋、平山の十三名である。

『共同の友』が、五所川原高等三学年の生徒による生活誌であるなら、そこに当然のごとく、校長以下の諸先生が登場する。その顔ぶれは、次の通りである。

木村校長、三上、寺田、和田、丸山（田山）、釜簿、斉藤、高橋、平野先生の九名。

## (二) 『共同の友』に見る寄宿生活と学び

「共同社」の十一名の寄宿生が共通して抱く夢、それは師範学校ないし旧制中学校への入学であった。その合格キップを手に入れるため、十一名の寄宿生はそれぞれに努力してやまない。

彼らがその夢を果たす上で、なによりも、まず、日々の生活規範が重大であった。規律ある生活を、彼ら十一名全員が心がけていた。『共同の友』の起筆の十一月廿三日に、「種々の規則を定め」というのは、そのためであろう。『共同の友』の中に、その生活規則そのものは、残念ながら、記載されてはいない。が、十一名が交代で綴った日誌を通観し総合すると、ほぼ、彼らの生活の実態がほの見えてくる。

「共同社」での彼らの一日の生活は、朝六時の起床と床上げに始まる。

朝六時 起床・床上げ

六時半～七時半 豫習

七時半 登校・朝食

八時半～十六時 授業・昼食

十六時半 夕食

十六時半～二十時 入湯・学習

二十時～二十時半 休憩・自由時間

二十時半～二十二時 学習・就寝

「社則」としての生活時間帯を復原すると、大略このようであった。

「共同社」の一員としての共同生活は、朝六時に始まり夜十時すぎの就寝に終わる。『共同の友』の内容も、ある意味では、その起床―就寝の綴り返しである。彼らの食事の場は、寄宿舎たる「共同社」ではなかった。

では、彼らはどこで食事をしていたのか。

「十二月廿六日 月曜日 (鹿) 曇

(前略) 学校へ行って柔道をやった。撃剣をもやった。ペコ／＼と減りきった腹を抱へて小使室に走り、ポヤ／＼と湯気の上ったまっ白い御飯を腹一ぱいに食べた。(中略) 社に帰ってから勉強したが昼の勉強が盛んであった気か、勉強にはそう気はむかない。(後略)」

若い彼らの空腹を満たしてくれたのは、小使室での食事であった。寄宿舎は、十一名の「共同社」生にとって、食事を除いた生活のすべてが営まれる場であった。小使室での食事も、例えば、正月四日には、「夕食には新年会をやり牛肉を食し、一同は満腹でした」とあるように、なか／＼豪勢であり、日誌のどこにも食事に関する不満は一言も見当らない。

因みに、前の十二月廿六日の日誌に対する「評」は、こうである。

「勉強振はなつて居らん。約束規則を守れぬやうなら人間の部類でない。」

寄宿生活における規則違反については、随所に厳しい指導がある。例えば、十二月六日、「館山君は朝起をした。一回目を醒して起きた時は、七時半であった。」とあれば、すかさず、「評」には「朝七時半に起きては、社則を破つてゐる。時間を励行して勉強して欲しい。」と来る。

共同生活では、ひとりのルール違反が全体に及ぶ。例えば、こんな内部告発があった。十二月廿日のことである。「工藤君は社に帰るや否や、湯屋に行くと言つて社を出で、大分待つても来ない。社生一同は不思議に思つてあたら八時半に社に帰り、聞くと湯屋にも行かず、斉藤先生の所に遊びに行き、後、校長先生の所にも遊びに行き、誠に困つたものではないませんか。今少し共同の心得を守つて欲しい。」

これを受け、「評」では、「工藤君の行動は果してそうだとすれば、宜しくない。反省するがよい。」と、指導が入る。

生活面で指導の入つた工藤は、その翌日の日誌にこう綴つた。

「十二月二十一日 水 前雪後曇 (寛)

昨夜、土岐・斉藤・館山・鹿内・杉江君より、寛大の忠告に預りし事よ。社生一同、相変らずの勉強に比し、私の無性奴、不規律、反省せよとの処置、小生、何條以て今朝より一層奮励……嗚呼、真面目に努めなくてはならぬ……反省し居り(後略)。」

社交家の工藤君がこう自己反省したのを受けて、「評者」は次のようにコメントした。

「工藤君、皆の忠言を入れて以後、注意することを誓つたのは男らしい。過を改むるに憚る勿れ」といふ古言もあるから、誰でも悪いと思つたことはあつたら、直ちに善に改めよ。」

『共同の友』の当初の目的は、既述したように、綴方の添削指導にあつたものの、その一方では、このように、道徳面の精神的修練の場ともなつていた。

一定の生活ルールを守りながら、「夢」を果たすべく、一心不乱に勉学に勤しむ姿とその緊張感に『共同の友』の至る所に漲っている。

その一・二例を紹介してみよう。

「十二月四日 日曜日 晴 (健)」

(前略)朝食を喫した後、各自教室に入って明日の豫習に熱中した。昼飯すんでからも、社に戻ってから休憩時間も休まずに勉強したが、午後八時頃、一大椿事マツバが起つた。それは電燈に故障が出来た。目前に学級試験と言ふ難問を控へそれに熱中して居る最中、暗夜に燈を失つた我々十人の心中を察し下さい。乃ち余と館山君と学校に走り、洋燈を借りて来て就けた。十一時頃迄、鈍い光の下で勉強した。床に就いた頃は四辺寂として音なく、唯乾橋になく犬の遠吠ばかり。其の寂莫を破つて居た。時の駄句に曰く、

冷蒲団、ごろ寝をするや、犬吠ゆる」

このように、寸暇を惜んでの勉強ぶりとは非情な停電を綴つたこの日の日誌の「評」はこうであつた。

「(評)勉強最中に電燈の消えたことは、さぞ困つたことだらう。真に同情する。日誌もだん／＼面白く読まれて来た。一般に文字を丁寧に書いて呉れ、ば、もう充分である。」

綴方の添削指導の効果が、いよ／＼現われ始めてきたようである。

大正十一年当時、函館師範学校の入学試験日は、二月十六日となつて

いた。その試験を目指す生徒にとっては、一月も二十四日にもなれば、かなりのプレッシャーを感じていたようだ。

「一月二十四日 火 雪 永」

(前略) 大いそぎで朝飯をすまし、いつもより後マズいが間もなく、豫習時間もすまし、其の日の学業も終へ、豫習もすまし一同退校した。口には言はんが、入学試験が心に掛ると見えて少しもなまけない(後略)。

末尾の「口には言はんが、入学試験が心に掛ると見えて少しもなまけない」は、短文の中にも、当時の「共同社」生の異様な切実感を十分に伝えている。

高等科三学年の生徒にとつて、日常の授業は、それが余りにも日常的すぎるので、日誌の対象にならない。そんな中で、『共同の友』において、生徒が最も眼を見開いて耳を傾けた話しが二つあつた。

一つは、十二月十四日の義士会に關してである。「十二月十四日 水

曜日 雪 (勝) (前略) 五時間目には、義士四十七士の討入の日を紀念として、義士会が行われた。この時、浪花節を話された。第一節に乃木將軍の墓参り、第二節には、大石良雄の勇気を表らわした(後略)。」と「勝」は義士会のことを印象深く日誌に綴つた。

もう一つは、政治談義に關して。「二月二拾参日 木曜日 晴 鹿(前略) 先生の熱心な教導に吾我は五時間休まず倦まず、殊に大隈侯、山県公の二人の比較したお話や政治の話には熱中して聞けた(後略)。」

というように、この大正十一年二月二十三日に、機を同じうして亡くなった大隈重信と山県有朋の歴史的人物をめぐる時事的な話には、生

徒たちは教科以外の新鮮味をもつて傾聴した。

師範学校ないしは旧制中学校を夢見ての、「共同社」の生活は、その生活規則といい、勉学といい、一定の苦難を伴うものであった。しかし、その苦難を懸命に乗り越えようとする気概が『共同の友』の全篇から伝わってくる。かと言って、「共同社」の生活は、規律と勉学の一色ではない。そこには、当然、人としての遊びや友情そして「夢」みる青春の軌跡があった。次に、その辺のソフトな群像を、『共同の友』の中に採ってみることにしよう。

### (三) 『共同の友』に見る「遊び」と「友情」そして「夢」

「拾一月二十七日 日曜日 曇 (伊)

(前略) 斉藤君と杉江君の両名、八時の休の時間にも休まず勉強した。他のものは、トランプの試合をやり、土岐君は負けて頭に瘤をつければ、倉光君・澤田君、勝って大得意であった(中略) 豫習後は雑談に時をうつし、永沢君・杉江君、家に遊びに行つて林檎と柿を持って来て、皆に御馳走し、皆満足して食べ、腹を下して便所に走つた者があつた。食し終り、鹿内君・倉光君・澤田君・土岐君の四人又もトランプにやり、他の者は雑談し、十一時頃に床に就く。」

この日誌には、余暇を利用して、遊びに興ずる無邪気な青春の像と、友が郷里から持ち寄つた土産を、仲睦じく頬張り合う交遊の像が、手に取るように、リアルに刻まれている。共同生活ならではの交友の一コマである。

こうした見るからに心麗しい場面は、勿論一・二度ではない。『共同の友』の中では、ごく日常的な日課ともなつていた。もう一つ、その例を引こう。

「拾一月二十九日 火曜日 雪 (工)

(前略) 八時より三十分休みあり。木・寺・倉・鹿・坂のトランプ、杉本・倉・寺・新の花、杉本・嵯・沢・米の将棋初むるあり。(中略) あ、我等は斯様にして勉強するもこれ皆両親のお蔭、如何にして之を報ゆべきか(後略)。」

トランプをする者、花札に熱中する者、将棋を指す者、じつに多士濟々の交遊である。

規律の中に遊びに興ずる彼らではあるが、いつもその念頭には、「これ皆両親のお蔭」という感謝の念があつた。この謝恩の思いが彼ら個人々々の「使命」感をより一層、増幅させていったことは言うまでもない。彼らは、こうした共同の生活を通して、友のなかに、さまざま個性を発見する。そしてそれを友として、相互に認め合う。これまた、共同生活が産み出す貴重な青春の宝である。

「十二月九日 金 晴 (永)

(前略) 工藤君、如何に気がむいたのか、冬にはやらぬ笛を吹き初めた。その手腕には皆、舌をまいておどろいた。次第くくと美音を立て来た。一同目をつぶり胸に手を押あて聞いた。」

十一名の「共同社」生の中に、「笛」の名手がいいたのである。時期外れではあるが、その友が奏でる美しき音色に、しばし耳を傾ける杜生た

ち。

社生の中には、こんな個性もあった。

「拾二月拾九日 日曜日 吹雪 健

「インイヅキンワンマンネンシヤ、朝之空気を振してうっとりして居た僕の耳元へ響いた。ヲヤ、此の美妙、二葉天外の再来か。彼は亦続けた様である。ソコヲコウセンデルコーメンソ、彼の声は次第に強く、弱く、緩く早く変幻の妙を極めて一息した様である。ソト頭をあげて見れば、二葉天外とはあやまり、之そ舎内随一の声音家・杉江寅雄（本名和三郎）その人である（後略）。」

十一名の社生の中に、歌手の二葉天外を彷彿とさせる「舎内随一の声音家」がいたのである。その妙なる美声に、社生一同は、うっとりとした。そこにも、友として互いに個性を認め合う、美しい光景があった。

個性と個性が、このように共存し共感し合う「共同社」にも、いよゝ所期の目的である師範学校の入試が、否応なしに近づいて来る。

十一名の彼らにとって、なによりの「夢」は、「皆は一生懸命に青森師（範）に入学したい事を望んで居ります」（二月二十六日、木曜日、吹雪、勝）や「坂本君の様に（函館）師範学校に入学し卒業後は、世間の人の信頼する教師になれるだらうか」（二月十日、火 雪 伊）というように、青森ないし函館の師範学校に入学し信頼される教師になることであった。

その日もいよゝ、間近かに迫ってきた。

一月二十五日、「授業後、師範入学希望者一同、入学願及入学志願書を配布された。それから二日後の二十七日、学校で「保証書及び履修

書」の記入をし、「親の印をおして、明日は志願書及び其の他のものをしっかりそろえて持参するやう」指示された。

一月二十九日、「健」は「朝食後、先生の世話で函館（師範）願書」を出した。

「二月十四日 火 晴 （工）

（前略）今日、坂本君を初めとして、函館師範学校へ試験を受けるに行った一行は、今頃は何處迄行ったであろう（後略）。」

と、「工」が綴るように、坂本君の先導でその後輩一行は、二月十四日、函館師範の入試に挑戦すべく、五所川原を旅立った。

函館師範学校の大正十一年度の「生徒募集要項」は、大略次のようであった。

○本科第一部の男子公費生約一六〇名

同第二部の男子公費約二〇名

○入学願書受理期限 大正十一年一月三十一日

○入学試験並体格検査……入学試験は大正十一年二月十六日より三日

間、午前九時より（体格検査は午後）当校  
及札幌師範、松山、後志、留萌、宗谷、網  
走、河西、浦河の七支庁及旭川、室蘭、釧  
路の三中学校、空知農業学校・根室商業学  
校に於て施行す。

○試験合格決定通知……三月下旬

○試問及体格検査……地方受験者で試験に合格せる者は四月七日午前八時まで当校に出願し、試問及体格検査を受く。

○入学許可……：試問及体格検査に合格した者に四月八日入学を許可す。

○現、高等小学校第三学年、中学校又は甲種程度の実業学校本科に在学（中略）の者は該証明書添付す。

函館師範学校の試験および合格発表の日程は以上のものであるが、『共同の友』の日誌は、入試日の二月十六日に向けて、その前々日の十四日に「函館師範学校へ試験を受くるに行つた一行」と、函館に向かつて記すのみで、何人が受験したのか、その内訳は不明である。ましてや、その合格通知は三月下旬とあるので、『共同の友』が三月六日で終筆してゐては、合格者も確認しえない。

ただその中であつて、北海道教育大学函館校同窓会の『夕陽会 会員名簿』によつて私たちが前に「共同社」の十一名として挙げた人物の「新井勝衛」の名が確認できる。

『夕陽会 会員名簿』に、「昭和二年 第2部（第8回）」の欄に「死亡 新井勝衛」と間違いなくある。「共同社」の「新井勝衛」は函館師範に入学しその第8回生として巣立つていたのである。この事実により、『共同の友』の史料的信憑性は、客観的に証明されたことになる。

その他、フルネームが不明の工藤、伊藤、沢田についても、『夕陽会名簿』には、その姓が見るので、追跡調査すれば、もう少し確認することが可能と思われる。

十一名の「共同社」生が、それ／＼に自らの夢を果たすべく、その青春の一時を送つた「共同社」での生活。彼らのこのかけがえない日々を、教える側の教師は、どう観ていたのであろうか。最後に、この点について、『共同の友』から聴いてみることにしよう。

#### （四）『共同の友』に見る教育事情

まず、五所川原高等小学校の管理者である校長に、当時の入試観を聴いてみよう。

大正十年当時の校長は、前にみたように木村校長である。その校長の入試観について、『共同の友』は「二月二十六日 木曜日 吹雪 勝」として、こう伝える。

「（前略）校長先生は三年の生徒や六年の生徒に、師範や中学校に行く人は今少しの間、うんと勉強して我が学校の名譽を上げる様の一つ奮発してくれとの話に、我等は学校を背ふて居る身であるから、一層奮発しなければなりません（後略）」。

入試が目前と迫まつた一月二十六日、校長は「学校の名譽」をかけての奮揮を生徒たちに促した。これは恐らく、時代と地域を超えた、ごくありふれた立場表明であらう。

この木村校長は、決して口先だけの立場表明に終わる人ではなかつた。熱心に手ほどきもする実践派でもあつた。

「二月四日 土曜日 吹雪 勝

（前略）九時、学校の鈴が鳴ると生徒は、教室に入った。校長先生が来て、試験の読方や算術の書方を教へました。試験に行つたら、第一心持を落付けないはなりませんと言ふた。最もであります（後略）」。

校長は入試の実践を真剣に説く、それに大きく頷く従順な生徒たちが、そこにはいる。師弟がきり結び教育の熱き絆がそこにはあつた。

一口に教育者とはいえ、この学校を統轄する校長と他の一般教師とは、微妙にその教育に対して、温度差があることは、世の常である。繰り返すまでもなく、『共同の友』の編集の最大の目的は、「共同社」の高等三年の生徒が首尾よく、函館なり青森の師範学校に合格するための、綴方の添削指導にあった。

その師範合格が彼ら十一名の「共同社」生の夢でもあった。そのために、『共同の友』は大正十年十一月廿三日に起筆された。以後、十一名は、自分の日々の生き様を、綴方の中に一生懸命に綴り、添削を受けて自己鍛錬に努めた。その意味で、十一名の入試に対する温度差は同じであるように思える。しかし、教師にも温度差があるように生徒の間にも温度差がある。このことを『共同の友』はその終筆で実に象徴的に綴っている。

「三月六日 月曜日 晴 (寛得)

(前略) 今日二時間の授業の時の事なり。修身を手にして“oo”を開けて入って来たのは圓山先生でした。そして真面目にお話してくれた。其の語の中に“現代は形式的(受験に付いて)である。我々には此の形式的を大いに駄破(くだやぶ)する責任が有るんだぜ? 自分の目的を達する上には適応する道を踏み行つて行くんだぜ、一層奮発してやらなければならん”云々と語られた。

「工藤寛得」は『共同の友』の末尾を、丸山(圓山)先生の、形式的な受験ではなく、自分の目的を、自分の「適応する道」の中に探れという教育観を引いて綴つたのは、なんとも象徴的である。

この一文は、いろ／＼な点で示唆的である。一つは、教師間における

受験をめぐる入試観の多様さである。校長を初め『共同の友』の「評者」は、「受験合格」に向けて一直線である。この一直線で画一化される教育の硬直を、この圓山先生の講話が救ってくれた。

もう一つは、この教師間の入試に対する多様性と表裏する、生徒たちの多様な価値観である。「工藤寛得」が「共同社」生のひとりとして、各個人にはそれ／＼「適応する道」があることを、しっかりと体得した教育的意味は測り知れぬほど大きい。

大正十年十一月廿三日から始まった「共同社」の生活は、明けても暮れても、規律の中の師範入学の夢が基調となっていた。ある意味では、『共同の友』の読者にとつて、それは息苦しく思われるかも知れない。その一方で、『共同の友』には遊びを通して友情を培かう健全な青春の像も展開している。

『共同の友』は、この張り詰めた一本の「勉強」という緊張感をタテ糸と、遊びと友情が程よく織りなすヨコ糸によって、編み上げられている。この『共同の友』の末尾を「工藤寛得」が、教育において、また人生において、自己に相応しい「適応する道」を求めることが最も肝要であることを、圓山先生に学び、そしてそれを自ら血肉化しようと、意気高らかに誓ったことは、なんとも象徴的である。

この『共同の友』に、何らかの教育的ないし教育史的な意義を見出すようにするならば、それは、ひとつに大正十年当時の師範学校を夢見て青春のエネルギーを燃やした青春の群像が『共同の友』の中に刻まれている点である。

もう一つは、大正十年というまさに「大正デモクラシー」の時代背景

をうけ、『共同の友』の中にも、厳しい勉学の向こうに、自由で闊達な曙光がほの見えている点である。昭和戦中期には予想もつかない教育の自由がそこにはある。学校という教育の場に、なにやら大らかな自由がそこにはある。その最も端的な表現が『共同の友』の結びの「自分の目的を達する上には、適応する道を踏み行つて行く」の一文ではなからうか。

この一文は、大正十一年三月六日を遙かにこえて、現代の私たちが人間として生きようとする心にも共鳴・共感する一名言であるように思う。『共同の友』はこのように、現代の私たちに対して、さまざまに人の道を教えてくれる教訓的な日誌でもある。

(ささき・かおる 北海道教育大学教授)